

To Forward

～前に向かって～

2023年9月1日

加中人権スローガン

「気づき・考え・行動する」

めざす学校像

「希望と笑顔あふれる楽しい学校」

長かったような短かったような夏休みが終わり、前期後半がスタートしました。今年の夏は、みなさんはどんな感動体験をしたのでしょうか。3年生が受験に向けて、毎日学校に自主学習に来て頑張っていたことが、私にはとても印象に残りました。

今年度は、様々な「世界 day」をこの人権通信で発信しています。9月を調べてみると、数多く「世界 day」があります。人権に関わるもので考えると、9月8日が「世界識字 day」、9日が「教育を攻撃から守る day」、18日が「平等な賃金の国際 day」、21日が「国際平和 day」などがあります。今現在も、世界では戦争や紛争が続き、平和な生活が脅かされたり多くの命が奪われたりしています。みなさんと同じ年代の子どもたちが、保障されなければならないはずの教育を受ける権利や機会も脅かされている現状です。「わたしたちには関係ない」「遠い国のことだから…」とと思っていませんか？

本校は、学校へ行って勉強できる環境づくりの一助となってほしいと願い、毎年アフガニスタンの子どもたちに使用しなくなったランドセルを送る活動に取り組んでいます。アフガニスタンでは数年間ですが、男女関係なく学校に通い学習に取り組み、望めば高校や大学にも進学することができるようになっていました。しかし、最近は状況が徐々に悪化しており、今年に入ってから女子は学校に通うことがほぼできなくなってしまっています。ここ数カ月の新聞には、時々このことに関する記事が掲載されていますが、みなさん気付いていましたか？この問題は宗教や民族、政治、経済などとても多くの背景があり、そのすべてをここで論じることはできませんが、一歩でも先に進むために、みなさんにもアンテナを高くしてもらいたいと思います。

私たちと関係が深いアフガニスタンの現状は、今回紹介した人権に関する「国際 day」のすべてに関わります。学校に行けず家庭の中でしか生活できない女性や女子は、識字（読み書き）に課題が生まれ、そのことが要因となり平等な賃金を受け取ることも難しくなります。その結果、自立した生活を望む女性の未来はあまり明るくないでしょう。もちろんアフガニスタンだけではなく、そのような社会を形成している国は他にも存在します。だからこそ、SDGsの17の目標の中に、ジェンダーフリーや貧困、子どもについて書かれているのです。

「日本は平和な国」とよく言われますが、それについても本当にそうなのか、「平和」や「戦争」に無関心で無知なだけなのではないかという視点をもってほしいと思います。世界で起こっている様々なことから、今や当事国だけの問題ではなく、必ずといっていいほど私たちも関係しています。物事を「自分フィルター」という一つの方向からだけではなく、多角的に見て考える力を身に付け、少しでも世界がよりよき方向へ向かうために、友達や家族、先生方と「自分はどう生きるか」を話し合っしてほしいと願っています。

法務局第41回全国中学生人権作文コンテスト内閣総理大臣賞

「大きく息を吸い込む世界へ」

広島県盈進学園盈進中学校 3年 松葉 悠乃

何を話しているのかわからない。周りの人が怖い。そう感じたことがあった。

私は6歳の頃から3年間、アメリカで暮らした。生活習慣も言語も違う国で、何もかもが初めてで、不安ばかりだった。英語もまったく聞き取れず、友だちもできず、孤立した。

アジア人の私を見て、うわさをしているんじゃないか。そう思えば思うほど、周りに話しかける勇気を失った。しかし、現地の小学校に通い始めて間もなく、状況が変わった。英語ができず、消極的だった私に、声をかけてくれる白人の女の子がいた。私が寂しくないようにと、自分から日本語を勉強し、たどたどしい日本語で話しかけてくれる笑顔の女の子。その気持ちがうれしかった。だから、その子といるのが楽しくて、肌の色や言語の違いが気にならなくなった。そうして私は、少しずつ積極的に、周りに話しかけるようになり、英語も次第に使えるようになった。

家族でラスベガスへ旅行に行った時、私は衝撃的な場面に出くわした。私の目の前にいたフードを被った男性に、いきなり白人男性が暴言を浴びせ、唾を吐きかけた。フードの男性は抵抗もせず、何事もなかったかのようにそのまま歩いていた。フードの男性は黒人だった。「ひどいことをされたのになぜ、言い返さないのだろう」と思ったが、小学2年生の私はただ怖くて、震えていた。でも中学3年生になった今、私は思う。あの瞬間、まさに目の前で人種差別が起きていたのだ。人として許されない差別が。今の私だったらあの時、唾を吐きかけられた黒人男性に、何と声をかけるだろうか。そして、白人男性に抗議できるであろうか、と。

2020年5月、アメリカで、黒人のジョージ・フロイドさんが、白人警察官による行き過ぎた拘束により、命を落とした。私にラスベガスの記憶がよみがえり、抗議デモなどの報道に接するたびに、胸が締め付けられる自分がいた。警官に9分29秒も首を押さえつけられる中、フロイドさんは27回も「息ができない」と訴えた。「袋の中の魚のように、ゆっくりと意識を失っていった。次第に白目になって、体がぐったりして命がついに消えた」。検察側証人の証言だ。フロイドさんは、この9分間に何を思ったのだろうか。「I can't breathe.」。彼の言葉が私の頭の中で響くたび、私は息苦しくなった。

私の息苦しきは限界に達しかけていた。そのとき、学校の先輩にその思いをぶつけてみた。その先輩は、フィリピン人と日本人のダブルで、生まれつき肌の色が少し濃い。小学生の頃、友だちに「肌が汚い」とからかわれ心に深い傷を負っていた。先輩は、高校卒業後、アイルランドへ留学したが、その矢先に、新型コロナウイルスの問題が世界を駆け巡った。その流行は、中国が起源とされたため、アイルランドでは中国人が差別の対象として狙われた。

ある日、先輩は、白人から「COVID-19」と罵られ、唾を吐かれたり、石を投げられたりしたそうだ。先輩は、普段はとてもコミュニケーションが得意で、多様な国籍を持つ友人をもつ。だから先輩は、「自分には人種に対する差別や偏見はない」と思っていた。だが、そのとき、自分の差別心を突き付けられたという。「自分が白人から差別されたことに対する怒りより先に、自分が中国人と間違われたことに対して不快感を覚えた自分がいた。その感情を自覚したとき、自分が一人の人間として、恥ずかしいと思った」と振り返る。この話を聞いて、私は思った。「『自分には差別する心はない』と思うことで、差別を見ようとしないうちから自分を作っているんじゃないだろうか。先輩の話は決して他人ごとではない。差別は自分の心の中で生まれる。自分にも当てはまることだ。自分の心を常に見つめる自分でなければ、差別は見抜けない。そう考えられれば、私の心はずっと『I can't breathe』のままなのだ」と。

アメリカでは黒人の人口が白人の約5分の1。だが、新型コロナウイルスでの死亡率は白人よりも黒人の方が高い。命に優劣があってはならないが、アメリカの一部の病院では黒人の患者に対して、治療どころか検査さえしてくれないという現実があったようである。6歳の私に話しかけてくれた女の子は、この現実をどうとらえているだろうか。

“Black Lives Matter”確かにそうだ。でも私は「All Lives Matter.」（すべての人の命は大切だ）と訴えたい。フロイドさんが繰り返した「I can't breathe」という魂の叫びといっしょに。誰もが一人の人間として、誰にでも分け隔てなく、他者と対等に向き合い、誰もが自分の言葉で、自分に誇りをもって語れる日々が来るために。そして、6歳に私に、笑顔で話しかけてくれた女の子のように。I deeply take a breath and shout my words to the world. 私は大きく息を吸い込み、世界にこう叫び続ける。「人はすべて平等で、すべての人が生きる権利を有する」と。